

# 新型コロナウイルスによる非対面式授業の現況

## Current Status of Non-Face-to-Face Classes Caused by COVID-19

権 英 秀

KWON Young-Su

This study, based on the non-face-to-face classes and the students' questionnaire conducted by this author, has compared two different classes types, ordinary years classes and COVID-19-time's. Through this comparison this author has considered, types of non-face-to-face classes, their merits and demerits, ways to improve classes.

キーワード：非対面式授業、オンライン授業、「レポート代替」授業、動画授業

### 1. はじめに

新型コロナウイルスによって教育現場では既存の対面式授業を中止し、非対面式授業を行わざるをえなくなった。そのために大学の授業でも非対面式授業として、①オンライン授業、②「レポート代替」授業、③動画授業など、さまざまな非対面式授業が行われるようになった。

非対面式授業が行われる前に著者をはじめ、多くの教員や学校関係者は対面式授業の長所や授業の質を非対面式授業においても保証できるか、また初めての試みである授業形式を教員や学校は上手に運用できるかについて度重なる議論や授業練習を行ってきた。

しかし、これまでは対面式授業を前提に準備してきた教員や学校は、新型コロナウイルスの感染危機が広まった2020年3月から新学期のために非対面式授業に変更したため、非対面式授業を準備するには時間的な余裕はなく、非対面式授業の短所や問題点などを十分検証ができず、完全に予想することもできないまま授業を始めた。

したがって、本研究では、著者の行った非対面式授業や学生のアンケートに基づいて、対面式授業と比べながら、非対面式授業の種類や長短所、改善点について考察する。

### 2. 非対面式授業の種類

#### 2.1 オンライン授業

新型コロナウイルスが社会的問題になる以前に大学で実施してきた対面式授業は、教室で教員と学生がリアルタイムで行うため、互いに一定の緊張感を持ちながら授業参加をしていた。教員は常に学生が教員の説明を理解しているか、集中力が落ちていないか、などの学習状況を

窺わなければならない。そのために教員は授業中に学生の学習態度を注意深く観察し、小テストや質疑応答、黒板などを適切に活用する必要がある。そして、学生も教員の説明の要旨を理解し、学習レベルを高める姿勢が必要であり、特に学生は授業に参加し、教員の説明について疑問がある場合は躊躇なくその場で質問する姿勢や、復習・予習と課題のために積極的な努力が求められる。

また、対面式授業において、学生は教員と 1 対 1 の練習も可能であり、学生同士での練習（グループ練習）も可能である。即ち対面式授業の中でグループ授業<sup>1</sup>を行うことができる。グループ授業は学生同士で相互の知識を確認し、交換することができ、互いに刺激を受けられるいい機会であり、相手との協力によって社会性、コミュニケーション能力、競争力などを養うこともできる。さらに本人の学習レベルも確認し、授業により積極的に望むことを促すことができる。そして、学生本人が現在授業で進度にちゃんとついていけるのかを確認でき、教員の説明を理解していないものの、質問することを躊躇する学生の不安を減らすこともできる。したがって、ゼミ授業や語学授業などではグループ授業を多く取り入れている。

以上のように対面式授業には、教員と学生が授業の緊張感があることによって、互いに授業に積極的に参加し、グループ授業のメリットを得ることができる長所がある。しかし、全国の大学では非対面式授業としてオンライン授業を実施しており、対面式授業の長所を完全に非対面式授業で維持できるかは保証できない。そのために教員はできる限り対面式授業の長所を失わず、授業の質を保てるようなオンライン授業を工夫しなければならない。

オンライン授業はパソコンを通してリアルタイムで行う授業である。オンライン授業は本来会社の遠隔会議のために開発されたオンライン会議システムを活用している。代表的なオンライン会議システムには ZOOM、GOOGLE MEET、WEBBEX などがある。これらを簡単に比較してみる。

オンライン会議システム	概略 (基本的な機能は似ているために、機能面の説明は省略する。)
ZOOM	教員個人でアカウントを取得できる。最大 1000 人まで参加できる。最大 100 人でグループ会議の場合 40 分まで無料である。
GOOGLE MEET	HANGAOUT MEET から変更される。UI が便利である。ELMS で提供される G Suite for Education に付帯され、教員ならずべて提供される。最大 250 人まで参加できる。
WEBBEX	最大 1000 人まで参加できる。大学から有償アカウントが提供される。携帯電話で電話しながら参加可能である。100 人・40 分まで無料である。

SKYPE	MICROSOFT 会社から制作され、50 人まで無料であり、最大 250 人まで参加できる。登録なしでも使用が可能である。資料共有ができない短所がある。使用制限後に音声会議に転換する。
TEAMLINK	最大 200 人まで参加ができ、ダブルクリックで会議を始める便利さがある。
REMOTEMEETING	PC、Mobile、Tablet などの多様な機器との相性がよい。マルチ会議ができる。Web ブラウザで使用可能。
GOTOMEETING	有料で、無料バージョンがない。Outlook、Office365、Google Calendar から参加可能である。

オンライン授業は、対面式授業のように教員と学生がリアルタイムで授業に参加しており、対面式授業に近い授業形式である。そのために対面式授業の長所と同様、教員と学生に適切な緊張感をもたらせて、互いに積極的な授業参加ができ、教員は学生の学習状況も確認することもできる。また以下のように対面式授業のような長所や、逆に対面式授業では得られない非対面式授業だけの長所がある。

著者の授業では、対面式授業で行った作文指導もオンライン授業で行っているが、対面式授業の時と変わらない指導ができています。まず、サブ・パソコンに学生の作文を見せてもらいながら、メイン・パソコンの画面で間違った所を直しながら学生に指導している。対面式授業での作文指導では、著者が直接学生の作文ノートに間違った所を直していたために、学生は教員の直した韓国語が読めない時<sup>2</sup>もあり、教員から直されたために学生が後で確認しない場合もあった。しかし、オンライン授業では WORD や ZOOM のホワイトボードなどでタイピングしてハングルを見せているために学生は文字の区別がたやすくなり、画面で直された所を本人の作文ノートに直接書き写しながら、間違った所および理由、正しい答えを確認するいい機会になっている。

次は、1 年生を対象にする語学教育では、通常発音教育から始まっている。対面式授業では教室の中で学生の発音指導をしているため、発音することを恥ずかしがる学生もおり、教室で発音が響いて正確に教員が聞き取れない場合もある。しかし、オンライン授業では、多くの学生がいても各学生は隣に人（同級生）がいないことから、1 対 1 の授業のように、対面式授業よりも恥ずかしがらずに発音練習をしている学生が多い。またマイクとスピーカの性能によって、教員は学生の発音をより綺麗に聞き取って発音指導をすることができるようになった。

そして、対面式授業では授業参加する出席率が非対面式授業の出席率より低い。特に教養科目の場合はより顕著に表れる。対面式授業の場合、通学するために支度して学校まで行かなければならない手間と時間がかかっていたが、非対面式授業は家でも簡単にオンライン授業に参加ができることから、出席率がよりよいのではないかと分析する。

また、対面式授業では主に黒板を活用して教員は授業を行っている<sup>3</sup>。著者も去年までは黒板を通じて学生に説明をしてきたが、オンライン授業ではWORDやPOWERPOINT、ZOOMのホワイトボードなどを使って授業説明をしており、文字もタイピングで書いている。そのためにタイピングが早い教員にとっては黒板で文字を書くより、時間のロスも少なく、綺麗に文字を学生に見せることができる。さらに、黒板で使った赤マーカー（チョーク）のように、パソコンで協調したい部分をたやすくさまざまな色や記号などで協調することもできる。

最後に対面式授業で行うグループ練習・授業がオンライン授業でも行うことができる。対面式授業では、毎回隣に座った学生（同じ相手）と練習したり、席を移動させてグループを作ったりすることで時間のロスなどを改善しなければならなかった。そして誰と誰をグループにすべきであるかという点も教員が悩むところであった。しかし、オンライン授業ではグループを自動・手動で分けることができ、無駄な時間のロスもなく、さまざまな学生と練習させることもできるメリットがある。

以上のように非対面式授業であるオンライン授業で得られる対面式授業と同様な長所と、対面式授業では得られないオンライン授業だけの長所を挙げてみたが、オンライン授業にも短所はある。

まず、オンライン授業はインターネットを通じて行うために、ネットワーク環境が非常に重要である。悪天候やアクセスが集中する時間の授業ではネット接続がよくない場合があるため、授業中に何度も参加しなす学生もいる。そのために、著者の授業ではネット接続が不安定そうな学生にはパソコンとスマートフォンの両方の授業参加を勧めている。

そしてパソコンに詳しくない学生が授業の前半に苦勞することである。しかし、この問題は授業するにつれて学生がパソコンを使いこなせるようになるため、大きな問題ではないと考える。また教員がオリエンテーションなどでパソコンの使い方<sup>4</sup>を学生と練習する機会を設けることも勧める。

## 2.2 「レポート代替」授業

2.1 で紹介したリアルタイムのオンライン授業以外に、授業として学生に毎回一定の資料を渡し<sup>5</sup>、学生自らが資料を読み、資料について感想文またはレポートを書いて教員に提出し、教員は添削やコメントをしながら授業を行う「レポート代替」授業がある。特にこの授業はオンライン授業を準備する余裕がなかった教員やパソコンに詳しくない教員、そして対面式授業のようにリアルタイムで授業を行わなくても授業に支障がないと考える教員が選択している。

「レポート代替」授業は、出された資料を学生が読みながら理解し、自らタスクをクリアするため、学生には学習の成就度も高く、タスクをクリアした場合は他の授業より満足度が一層高く感じられる。そしてタスクをクリアするにつれて学生は授業により積極的に臨んでいくことも期待できる長所がある

しかし、「レポート代替」授業は大学の新生に最初から行うことは難しいと考える。1年生は大学のアカデミック・ライティングに慣れておらず、資料の読み方や情報の探し方にも慣れていない。半面、2年生～4年生の場合はレポートの書き方や、資料の活用法もある程度経験しているために、「レポート代替」授業の長所を得ることができる。

ただし、対面式授業の長所でもある疑問のある時、学生が気軽にその場で先生に質問することが「レポート代替」授業でも行うことができるように工夫しなければならない。無論提出する感想文やレポートに質問を書くこともできるが、疑問を感じて質問をし、その場で答え（正解）を教員から聞くリアルタイム授業での質問形式と異なるため、「レポート代替」授業で学生の質問と教員の答え（正解）には時間差があることによって、学生は本人の行った質問に興味を失い、教員の答えを期待しなかったり、見過ごしたりする可能性もある。

また「レポート代替」授業ではグループ授業ができないことも短所の一つである。2.1で取り上げたようにグループ授業（ここではグループでのレポートを含む）は、学生同士で練習をしたり、同じタスクを遂行したりすることによって、本人の学習レベルを確認し、コミュニケーション能力を鍛え、授業により積極的に望むことを促すことができる長所がある。しかし、非対面式授業である「レポート代替」授業では個々の学生がレポートを作成することが多いため、グループ授業の長所をあまり得ることができない。

したがって、「レポート代替」授業で、対面式授業の長所であるリアルタイム授業のような質疑応答ができるように工夫が求められ、グループ授業の長所が得られる工夫も必要である。たとえば2.1や2.4のように決まった時間に先生と質疑応答ができる方法を設けることによって、「レポート代替」授業の短所を補うことも可能であり、学生同士のオンライン会議システムやSNSなどを活用してグループ授業と同様な授業方式を設ける方法もある。

### 2.3 動画授業

動画授業は、教員が授業の動画を予め撮って動画サイト（主にユーチューブ（YOUTUBE））に載せて行う非対面式授業である。動画授業の長所はリアルタイム授業と異なって、教員が事前に授業を録画するため、授業がスムーズに進み、無駄のない説明を学生に提供することができることである。さらに学生は時間に拘らず、いつでもどこでも授業を視聴することができることである。

しかし、動画授業は視聴時間の制約がないことから、学生に授業の緊張感を与えられず、積極的な授業参加を期待することができない<sup>6</sup>。また誰もが載せた授業動画を視聴することもできるため、学生以外の人による悪戯も起きる可能性がある<sup>7</sup>。

したがって、動画授業では、対面式授業のように学生に一定の緊張感を与え、積極的に参加をしてもらうために、授業の動画を一定の時間が経ったら視聴できないようにしたり、動画の視聴を許可された視聴者（学生）に限定して視聴できるようにしたりする工夫が必要である。

また学生以外の人も視聴可能にした場合は悪戯しないように、コメント欄に自由にコメントができないようにする必要もある。

動画授業のもう一つの短所は、学生が質問する場合コメント欄にメッセージで行うか、メールなどで教員に行わなければならないことである。そのために教員は学生の質問についてリアルタイム授業のように答え（正解）を教えることができない。しがたって学生の質問と教員の答え（正解）には時間差があることによって、質問した学生は質問に興味を失ったり、教員の答えを待たなかったりする可能性もあり、教員からの一方的な授業であるため、グループ授業の長所（情報交換、学習レベルの認知、コミュニケーション能力の養成など）を期待することもできなくなる。

以上のように学生との質疑応答の問題点や、グループ授業ができない点については、2.2でも取り上げたように動画授業以外にも、学生と一定のコミュニケーションが取れる工夫が必要である。それによって学生は自ら思った疑問や理解できなかった部分を先生に積極的に確認することができる。そして同じ授業を取る学生同士で情報交換が行える場を提供することによって授業で学生自ら本人の理解度をチェックし、一人での学習による不安を払拭することが期待できる。

## 2.4 その他

現在<sup>8</sup>2.1～2.3で確認した非対面式授業が多く行われている中、大学生にパソコンよりスマートフォンの普及率が高く、SNSの活用法を大学生は詳しく知っているため、SNSを利用した授業も少数の教員が行っている。特にSNSの中でもライン（LINE）が提供するLINE LIVEを利用する授業がある。

LINE LIVEとはライブ配信プラットフォームであり、配信者が一方的にライブを行い、視聴者が視聴するために2.3と同様に、動画授業の特徴を持っている。ただし、動画授業と異なる点は、授業をリアルタイムで行うことができる部分である。そのためにLINE LIVEは2.1のオンライン授業のようにリアルタイムで授業が可能であり、学生にも対面式授業と同様な授業の緊張感を与えることができる。そして先生もその場で学生の反応（メッセージなどによって）を窺いながら授業運用をスムーズに行うことができる。

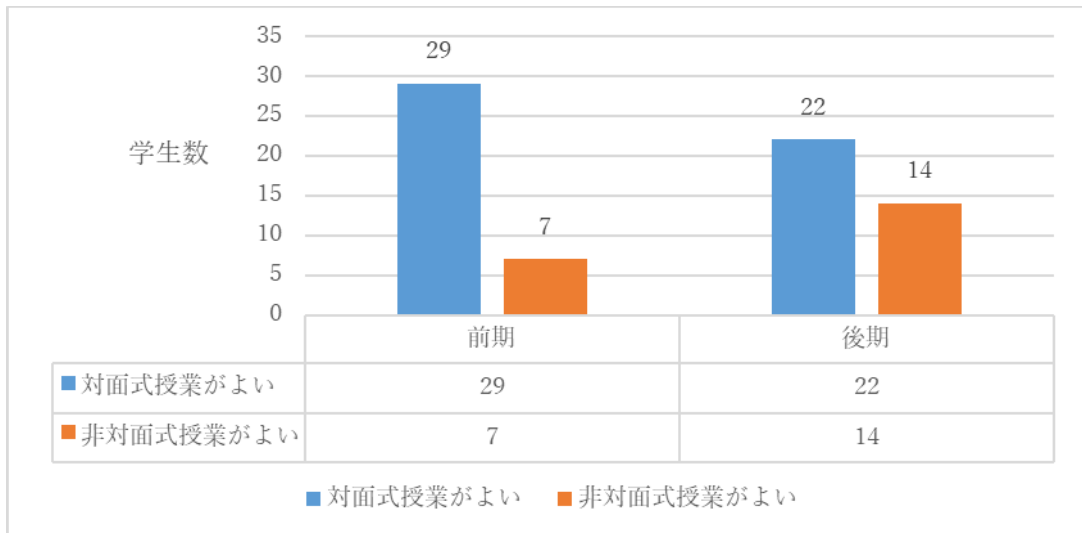
しかし、LINE LIVEは配信者が一方的にライブを行うため、「レポート代替」授業や動画授業と同様にグループ授業の長所を期待することができない。したがって、2.2と2.3で紹介したようにLINE LIVEと別途、学生同士のコミュニケーション場を提供する必要がある。

## 3. アンケート

### 3.1 1年生のアンケート

まず、2020年度に入学した大学生に対面式授業と非対面式授業について前期と後期にわたっ

て2回アンケートを行った。



アンケートの結果、新入生は前期と後期に対面式授業を希望する学生が多かった。特に対面式授業を希望した学生は以下のような理由を挙げている。

- ①何もわからないから、まず、対面式授業をやってほしい。
- ②友達がいらない。
- ③パソコンに詳しくない。
- ④パソコンがない。
- ⑤インターネットが家で使えない。
- ⑥学校に通いたい。

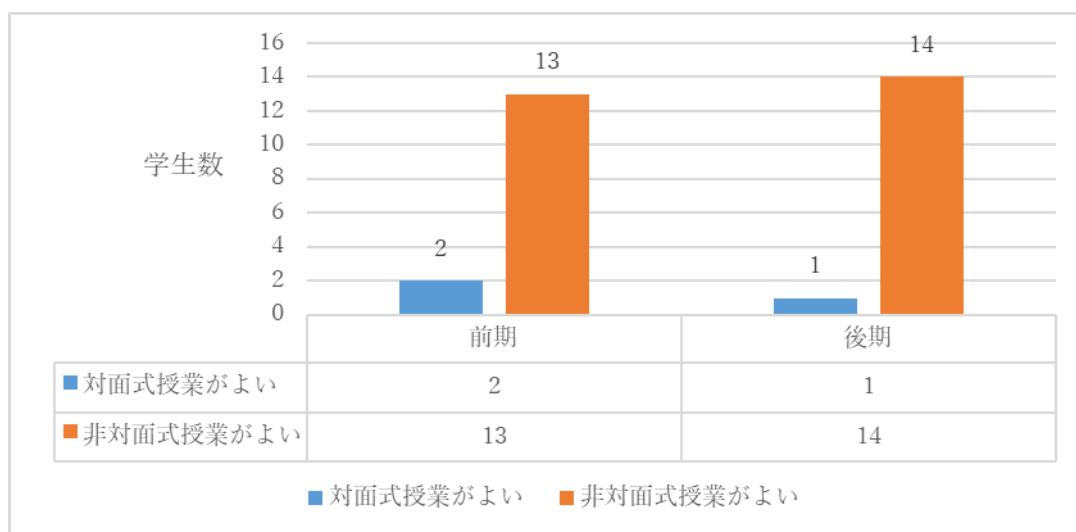
新入生は新型コロナウイルスによって、大学に対するイメージ（入学して新しい友達に出会い、高校と異なる大学生の授業や生活をしたなど）と異なる大学生生活を余儀なくされた。そのために、特に友達との触れ合いや、通常の大学生活を理由に対面式授業を希望した学生が多かった。また非対面式授業で必須条件であるネット環境やパソコンに関する理由で対面式授業を希望する学生もあった。

しかし、後期のアンケートでは、対面式授業を希望する学生が前期と同様多かったが、非対面式授業を希望する学生が多くなってきた。対面式授業から非対面式授業に希望を変えた学生がいる理由はネット環境やパソコンの問題が解決されたため、非対面式授業の不便さが少し改

善されたからである。ただし、後期のアンケートで前期と同様に対面式授業を希望した学生は上記の②と⑥の影響が改善されていないからだと考えられる。また、教員に質問をしても、返信が遅かったり、返信すら来なかったり、質問する方法がややこしかったりすることも一つの理由であった。

### 3.2 2年生～4年生のアンケート

次は、2年生～4年生の大学生に対面式授業と非対面式授業について前期と後期にわたって2回アンケートを行った。



アンケートの結果、新入生と異なって、2年生～4年生の大学生は前期と後期に非対面式授業を希望する学生が多く、後期になっても前期と大きく変動はなかった。特に非対面式授業を希望した学生は以下のような理由を挙げている。

- ①出席しやすい。
- ②自分の時間を活用しやすい。
- ③対面式授業と非対面式授業の違いがない。
- ④実家で受講できるので、一人暮らしをしなくてもいい。
- ⑤お金の心配がない。

新入生は友達との触れ合いや、学校の生活、ネット環境などを理由に対面式授業を希望した



が、2年生～4年生の場合は友達との触れ合いもあり、学校の生活をした経験もあるため、対面式授業を希望する学生は1人しかいなかった。逆に1年生の時に大変だった通学や、学校の時間割、一人暮らしによる経済的問題が非対面式授業では解決されたことから非対面式授業を希望したと考えられる。ただし、後期のアンケートでは、非対面式授業を希望した学生の多くは、これまでの授業形式と違って、非対面式授業を主として行いながらグループ課題や実習などの授業だけを対面式授業にすることを希望した。すなわち、今回の2年生～4年生のアンケートでは、今まで当然だと思っていた授業形式である対面式授業が新型コロナウイルスによって、これからの授業形式を変えなければならないことが分かった。

#### 4. まとめ

今回は、著者の行った非対面式授業や学生のアンケートに基づいて、例年の授業形式であった対面式授業と新型コロナウイルスによって行われた非対面式授業を比較しながら、非対面式授業の種類や長短所、改善点について考察してみた。

現在、非対面式授業としては「オンライン授業」、「レポート代替の授業」、「動画授業」が主に行われているが、それぞれ長短所があり、対面式授業と比べて改善点も表れた。しかし、対面式授業にも短所があり、その短所が改善できる非対面式授業の長所もあった。特に「オンライン授業」では語学教育の場合は、対面式授業よりもよい点として、「学生の発音指導が細かくできる」、「作文指導のしやすさ」、「黒板の使い方の便利さ」などが挙げられる。

また、アンケートの結果を見ると、新入生は大学の生活や友達との出会いなどを重視して、対面式授業を希望したが、2年生～4年生の場合は生活費用や通学の大変さ、時間の活用などを重視して、非対面式授業を希望した。

新型コロナウイルスの終わりが見えない現在、大学の教育（授業形式）は学生や教員、大学関係者のためにも慎重に考えなければならない。本研究に基づいて、例年のように対面式授業に戻すことに主力するのではなく、学生のニーズにも合わせて対面式授業と非対面式授業との適切な使い分けが必要になり、いわゆるハイブリット型授業形式の導入を考えなければならないと考える。

---

#### 注

- 1 ここでは、グループ授業は複数の学生同士でタスクを遂行することを言う。たとえば、隣の学生と練習する。グループで調査し発表する。
- 2 例えば、「ス、ヲ、エ、ホ、リ、ル、ル、ル、ル、ル」のフォント（書き方）によって読めない場合。
- 3 他に POWER POINT による説明や資料による説明などもある。
- 4 授業参加の仕方、オンライン授業のシステムの使い方など。
- 5 学校の学務情報システムや学生メールなどにアップロードする。

- 
- <sup>6</sup> ストリーミングによって 2.1 のようなオンライン授業を行うこともできるが、ユーチューブでオンライン授業を行う教員もいない。なぜならユーチューブでのストリーミングは学生以外の人も視聴が可能であり、学生側はメッセージでしか先生に伝える方法がないためである。
- <sup>7</sup> 誹謗やわいせつなコメントを書くこともありうる。
- <sup>8</sup> 2020 年 4 月 20 日から 2020 年 11 月 30 日までの調査に基づいた研究である。

## 参考文献

- 梅田博之 (1985) 「韓国人に対する日本語教育と日本人に対する韓国語教育」『日本語教育』第 55 号 日本語教育学会。
- 権 英秀 (2017) 「日韓両言語の否定形について—日本人大学生の作文から—」『言語の普遍性と個別性』第 8 号 新潟大学 pp.41-55.
- (2018a) 「韓国語の統語的アプローチ」『言語文化研究』第 22 号、新潟大学 pp.11-24.
- (2018b) 「韓国語教育の問題点と提案—テキストと授業について—」『ことばと暮らし』第 30 号 新潟県ことばの会 pp.左 30-43.